

12/3 Tue.

第643回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.643 / Suntory Hall 19:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner

ソプラノ
Soprano

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano

テノール
Tenor

バス
Bass

合唱
Chorus

合唱指揮
Chorusmaster

ベリオ作品のソリスト
Soloists for Sinfonia

ソプラノ
Soprano

アルト
Alto

テノール
Tenor

バス
Bass

音響
Sound

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6
MASATO SUZUKI

ジョアン・ラン☆ -p.8
JOANNE LUNN

オリヴィア・フェアミュレン☆ -p.8
OLIVIA VERMEULEN

ニック・プリッチャード☆ -p.9
NICK PRITCHARD

ドミニク・ヴェルナー☆ -p.9
DOMINIK WÖRNER

ベルリンRIAS室内合唱団☆ -p.10
RIAS KAMMERCHOR

ジャスティン・ドイル -p.10
JUSTIN DOYLE

オラフ・カツザー*
OLAF KATZER*

ベルリンRIAS室内合唱団メンバー*
Members of RIAS KAMMERCHOR*

アンゲラ・ポストヴァイラー、エスター・チムケ
ANGELA POSTWEILER, ESTHER TSCHIMPKE

スザンネ・ラングナー、ヒルデガルト・リューツェル
SUSANNE LANGNER, HILDEGARD RÜTZEL

フォルカー・ニーツケ、吉田志門
VOLKER NIETZKE, SHIMON YOSHIDA

マティアス・ルツェ、ジョナサン・E. デ・ラ・パズ・ザエンス
MATTHIAS LUTZE, JONATHAN E. DE LA PAZ ZAENS

有馬純寿*
SUMIHISA ARIMA*

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

ベリオ
BERIO

[休憩]
[Intermission]

モーツァルト
MOZART

シンフォニア [約35分]* -p.16
Sinfonia*

I. II. O King III. IV. V.

音響協力: 有限会社オアシス
機材協力 (マイクロフォン): 株式会社ORB 

レクイエム ニ短調 K. 626 (鈴木優人補筆校訂版)
[約50分]☆ -p.20

Requiem in D minor, K. 626 (corrected and revised by M. Suzuki)

- I. イントロイトゥス (入祭唱)
- II. キリエ (憐れみの讃歌)
- III. セクエンツィア (続唱)
- IV. オッフェルトリウム (奉献唱)
- V. サンクトゥス (感謝の讃歌)
- VI. ベネディクトゥス (感謝の讃歌)
- VII. アニュス・デイ (平和の讃歌)
- VIII. コンムニオ (聖体拝領唱)

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成:  文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
 独立行政法人日本芸術文化振興会

助成: 公益財団法人ロームミュージックファンデーション

 ゲーテ・インスティトゥート

協力: アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビの収録が行われます。

12/14 Sat.

第272回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 272 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

12/15 Sun.

第138回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 138 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

12/18 Wed.

第677回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 677 / Suntory Hall 19:00

12/19 Thu.

第40回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No. 40 / Festival Hall 19:00

12/22 Sun.

第272回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 272 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Conductor

※12/17、24公演については、次ページをご覧ください。

フランチェスコ・アンジェリコ -p.7
FRANCESCO ANGELICO

※他の出演アーティストは次ページをご参照ください。

ベートーヴェン
BEETHOVEN

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] -p.26
Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

- I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
- II. Molto vivace
- III. Adagio molto e cantabile
- IV. Presto – Allegro assai

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
協賛：非破壊検査株式会社 (12/19)、大和ハウス工業株式会社 (12/19)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
文部科学省 独立行政法人日本芸術文化振興会 (12/14、12/15、12/18、12/22)
協力：横浜みなとみらいホール (12/15)、コジマ・コンサートマネジメント (12/19)

12/17 Tue.

SHINRYO presents 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール 19時開演
SPECIAL CONCERT, presented by SHINRYO / Suntory Hall 19:00

12/24 Tue.

大成建設 presents 〈第九〉特別演奏会
ミューザ川崎シンフォニーホール 19時開演
SPECIAL CONCERT, presented by TAISEI CORPORATION / Muza Kawasaki Symphony Hall 19:00

指揮
Conductor

フランチェスコ・アンジェリコ -p.7
FRANCESCO ANGELICO

ソプラノ
Soprano

中村恵理 -p.11
ERI NAKAMURA

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano

清水華澄 -p.11
KASUMI SHIMIZU

テノール
Tenor

ダヴィデ・ジュスティ -p.12
DAVIDE GIUSTI

バス
Bass

エギルス・シリンス -p.12
EGILS SILINS

合唱
Chorus

新国立劇場合唱団 -p.13
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

合唱指揮
Chorusmaster

水戸博之 -p.13
HIROYUKI MITO

コンサートマスター
Concertmaster

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

【第1部】〈オルガン・ソロ〉
オルガン
Organ

大木麻理 -p.14
MARI OHKI

スコット
SCOTT

クリスマス・セレブレーション [約6分] -p.29
Christmas Celebration

J. S. バッハ
J. S. BACH

古き年は過ぎ去りぬ BWV 1091 [約2分] -p.29
Das alte Jahr vergangen ist, BWV 1091

ヴィドール
Widor

オルガン交響曲 第5番から〈トッカータ〉 [約6分] -p.29
"Toccata" from Organ Symphony No. 5

[休憩]
[Intermission]

【第2部】〈第九〉
ベートーヴェン
BEETHOVEN

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分] -p.26
Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"

※詳細は前ページをご参照ください。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：三菱冷熱工業株式会社 (12/17)、大成建設株式会社 (12/24)

※12/17公演では日本テレビの収録が行われます。

指揮

鈴木優人

(指揮者/クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partnerマサトが振る
究極の〈レクイエム〉

©読響

指揮者、作曲家や鍵盤楽器奏者など八面六臂の活躍を続ける気鋭・鈴木優人が、自ら補筆校訂したモーツァルト〈レクイエム〉と、20世紀音楽で最も重要とされるベリオの〈シンフォニア〉を並べた斬新なプログラムを披露する。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外の楽団と共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭をはじめ、欧州各地で演奏をしている。23年3~4月には、名門オランダ・バッハ協会に客演し、J. S. バッハ〈マタイ受難曲〉(全13公演) を指揮した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務め、NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月から読響の指揮者/クリエイティブ・パートナーとして多くの公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュースして好評を博している。23年4月から関西フィル首席客演指揮者。九州大学客員教授。

指揮

フランチェスコ・アンジェリコ

FRANCESCO ANGELICO, Conductor

イタリアの俊英が振る
胸に迫る《歓喜の歌》

©Giancarlo Pradelli

ドイツを拠点に、欧州各地の歌劇場やコンサートで活躍するイタリアの俊英アンジェリコが、パッション溢れるタクトで、ベートーヴェンの音楽の神髄に迫る。

1977年、シチリア島のカルタジローネ生まれ。モデナ音楽院でチェロを学んだ後に、2003年よりルガーノ (スイス) のスヴィツェラ・イタリアーナ音楽院で指揮をジョルジオ・ベルナスコーニに学ぶ。

2013~17年までインスブルック・チロル響の首席指揮者を、15~17年までインスブルック・チロル歌劇場の首席指揮者を務め、在任中には〈マリア・ストゥアルダ〉〈運命の力〉〈フィデリオ〉〈タンホイザー〉などを指揮。〈アドリアーナ・ルクヴール〉の上演では、16年にオーストリア音楽劇場賞を受賞。17年からドイツのカッセル歌劇場の音楽総監督を経て、現在は首席指揮者の任にある。同歌劇場では、〈ニーベルングの指環〉〈ヴォツェック〉〈ファルスタッフ〉〈イエヌーファ〉など幅広いレパートリーを振り、高い評価を得ている。

定期的に欧州の主要歌劇場にも客演し、バイエルン国立歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場、ケルン歌劇場、トゥールーズ・キャピトル劇場、イェーテボリ歌劇場、グラーツ歌劇場などで、〈シモン・ボッカネグラ〉〈蝶々夫人〉などを指揮。日本では新国立劇場で〈セビリアの理髪師〉を指揮している。またライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、リンツ・ブルックナー管、モンテカルロ・フィル、MDRライブツィヒ放送響、ポローニャ市立劇場管などにも客演している。21年のコロナ禍による来日キャンセルを経て、今回が読響初登場。



©Redpath Studios Photography

ソプラノ

ジョアン・ラン

JOANNE LUNN, Soprano

澄んだ歌声で聴衆を魅了し続けているイギリスを代表する歌手。英国王立音楽大学でタゴール・ゴールドメダルを得て卒業。〈ポッペアの戴冠〉でイングリッシュ・ナショナル・オペラにデビュー以降、〈真夏の夜の夢〉〈オルフェオ〉などに出演。コンサートのソリストとして、モンテヴェルディからマーラーまで幅広いレパートリーを歌い、特にバロック音楽を得意としている。レオンハルト、鈴木雅明、ミンコフスキ、ガーディナー、ノリントン、ピションら名匠の指揮で、ロンドン響、ベルリン古楽アカデミー、コンチェルト・ケルン、バッハ・コレギウム・ジャパン、コンチェルト・コペンハーゲン、ロツテルダム・フィルなどと共演。CDも数多くリリース。読響初登場。

柔らかな声質で国際的に評価を得ているメゾ・ソプラノ。ベルリン芸術大学で学ぶ。バイエルン放送主催の国際声楽コンクール優勝など受賞歴多数。ヤノフスキ、ハーディング、ヤーコプス、ツァグロゼクらの指揮で、ベルリン国立歌劇場、パリ・オペラ座、チューリヒ歌劇場や、ミュンヘン・オペラ・フェスティバル、ブレゲンツ音楽祭、ルール・トリエンナーレなど音楽祭にも出演。ベルリン・フィル、ロンドン響など著名楽団とも共演している。バロック作品にも情熱を注いでおり、鈴木雅明指揮のバッハ・コレギウム・ジャパンのバッハ〈マタイ受難曲〉やグラモフォン賞を受賞したモーツァルト〈ミサ曲八長調〉のCD録音にも参加。読響とは2022年12月の鈴木優人指揮の〈第九〉公演で共演し、好評を博した。



©felix broede

メゾ・ソプラノ

オリヴィア・フェアミュレンOLIVIA VERMEULEN,
Mezzo Soprano

©Nick James

テノール

ニック・プリッチャード

NICK PRITCHARD, Tenor

J.S. バッハやモーツァルト作品で絶賛されている俊英。1989年英クックフィールド生まれ。これまでにルセ、エメリヤニチェフ、エガー、アイム、カーニン、ピションらの指揮で、エイジ・オブ・エンライトメント管、アンサンブル・ピグマリオンなどと共演。2021年8月には、BBCプロムスでモーツァルト〈レクイエム〉のソロを歌い、高い評価を得た。近年は世界各地でバッハ〈ヨハネ受難曲〉〈マタイ受難曲〉に福音史家として出演しており、23年にグラモフォンからリリースされたガーディナー指揮〈ヨハネ受難曲〉がグラミー賞にノミネートされた。グラインドボーン音楽祭ツアーでの〈魔笛〉タミーノ、英国ロイヤル・オペラでの〈ウリッセの帰還〉アンフィノモなど、各地のオペラに出演している。読響初登場。

「深遠なバス」と高く評価されている実力派。1970年ドイツのグリーンシュタット生まれ。教会音楽、音楽学、チェンバロを学び、声楽とオルガンでディプロマを取得。2002年ライブツィヒ・バッハ・コンクール優勝。コワン、ヘンゲルブロック、リリンク、ヘレヴェッヘ、鈴木雅明、S.クイケン、ホーネック、エラス=カサドラの指揮で、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ベルリン・ドイツ響、バンベルク響などと共演。世界各地のホール、国際音楽祭に出演している。バッハ・コレギウム・ジャパンには度々登場しており、〈パウルス〉〈ヨハネ受難曲〉の独唱を務め、好評を博した。日独リートフォーラム主宰。キルヒハイム音楽祭芸術監督。読響初登場。



©Wolfgang M. Schmitt, Kindenheim

バス

ドミニク・ヴェルナー

DOMINIK WÖRNER, Bass

合唱

ベルリンRIAS室内合唱団

RIAS KAMMERCHOR, Chorus

カラヤン、ベーム、ラトルら巨匠と共演してきた世界最高峰とされる合唱団。1948年にベルリンの米軍占領地区放送局 (RIAS) のために設立。ルネサンスやバロック時代の歴史的な解釈にもとづく演奏から、古典派やロマン派、新作の世界初演までレパートリーは多岐にわたる。2017年からジャスティン・ドイルが首席指揮者および芸術監督。ドイツ国内外で年間50回のコンサートを行い、文化大使として重要な役割を担っている。ベルリン古楽アカデミー、ヨーロッパ室内管、フライブルク・バロック管といったアンサンブル、またラトル、ヤーコプス、ネゼ=セガン、ヘンゲルブロックらの指揮者たちと長年にわたり共演。録音も数多く、グラモフォン賞、エコー賞など受賞多数。読響とは2018年以来、2度目の共演。



©Oliver Look

合唱指揮

ジャスティン・ドイルベルリンRIAS室内合唱団
首席指揮者、芸術監督JUSTIN DOYLE, Chorusmaster
RIAS Kammerchor
Chief Conductor

1975年英ランカスター生まれ。ウェストミンスター大聖堂聖歌隊を経てケンブリッジ・キングス・カレッジ合唱団員となる。2006年カダケス国際指揮コンクール第2位。BBCシンガーズの初代指揮者フェロー。2017年からベルリンRIAS室内合唱団の首席指揮者および芸術監督を務める。MDRライブツィヒ放送合唱団、フライブルク・バロック管、ノルウェー・ソリスト合唱団、ポズナン・フィル、フィンランド・バロック管、ヴロツワフ・バロック管、オペラ・ノース管、ロイヤル・ノーザン・シンフォニア、カンマーアカデミー・ポツダムなどと共演。ベルリンRIAS室内合唱団と毎年新たな委嘱作品を多数手がけるほか、ルネサンス期のポリフォニー音楽といった合唱団にとって新しいレパートリーにも取り組んでいる。



ソプラノ

中村恵理

ERI NAKAMURA, Soprano

世界の一流歌劇場で活躍するディーヴァ。大阪音楽大学卒業、同大学院修了。新国立劇場オペラ研修所を経て、2008年にネトレブコの代役として英国ロイヤル・オペラにデビューし、一躍脚光を浴びた。10~16年、バイエルン国立歌劇場のソリストとして専属契約し、〈魔笛〉〈ホフマン物語〉などで主要キャストを務める。これまでヴァイグレ、パッパーノ、K. ペトレンコらの指揮で、ベルリン・ドイツ・オペラ、ワシントン・ナショナル・オペラなどに客演。16年には〈チェネレントラ〉のクロリダでウィーン国立歌劇場にデビュー。21年には新国立劇場、22年には英国ロイヤル・オペラに〈蝶々夫人〉の題名役で出演し好評を博した。15年度芸術選奨文部科学大臣新人賞ほか受賞多数。読響とは21年以来、2度目の共演。

これまでも読響と数々の名演奏を重ねている実力派。静岡県出身。国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て渡伊。2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカで二期会デビュー。バーデン市立劇場〈こうもり〉オルロフスキー、二期会〈ドン・カルロ〉エボリ公女、〈ローエングリン〉オルトルート、新国立劇場及び中国国家大劇院〈アイダ〉アムネリス、日生劇場〈ルサルカ〉イェジババなどで絶賛された。コンサートでは、マーラー〈復活〉やヴェルディ〈レクイエム〉、ドヴォルザーク〈スターバト・マーテル〉などで主要楽団と多数共演。また18年6月には初のリサイタルを開催。24年夏には、佐渡裕プロデュースオペラ〈蝶々夫人〉にスズキで出演して好評を博した。二期会会員。



©Mariko Tagashira

メゾ・ソプラノ

清水華澄KASUMI SHIMIZU,
Mezzo Soprano

12/14
|
12/24
〈第九〉公演

Artist



©Laura Broccolo

テノール

ダヴィデ・ジュスティ

DAVIDE GIUSTI, Tenor

伸びやかな美声で欧州にて注目を浴びるテノール。イタリアのチヴィタノーヴァ・マルケ生まれ。フェルモ音楽院を優秀な成績で卒業し、これまでにレナータ・スコットらのもとで研鑽^{けんさん}を積む。2012年にペーザロのロッシーニ音楽祭のアカデミー公演で〈ランスへの旅〉ベルフィオールを歌い頭角を現す。ドミンゴが主催するコンクール「オペラリア」や、レナータ・テバルディ国際声楽コンクールで第2位入賞など受賞歴多数。ムーティ、チョン・ミョンフン、ナガノ、クルレンツィスらの指揮で、ジュネーヴ歌劇場、ポローニヤ歌劇場、ポリシヨイ劇場、エーテボリ歌劇場などに出演。近年は〈ラ・ボエム〉ロドルフォ、〈蝶々夫人〉ピンカートン、〈椿姫〉アルフレードなどを歌い成功を収めている。読響初登場。

12/14
|
12/24
〈第九〉公演

Artist

世界の檜舞台でワーグナー作品などを歌い続けている巨匠。1961年旧ソ連・ラトビア生まれ。ラトビア音楽アカデミーを卒業後、〈メフィストフェレ〉でラトビア国立歌劇場にデビュー。その後〈清教徒〉でウィーン国立歌劇場にデビューし、ブレゲンツ音楽祭でルビンシテイン〈デーモン〉の表題役を歌い国際的に高く評価された。これまでにバイロイト音楽祭をはじめ、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、東京・春・音楽祭などで、〈さまざまオランダ人〉オランダ人、〈ラインの黄金〉〈ワルキューレ〉ヴォータンなど90を超える役を歌い、活躍している。現在、リトアニア国立歌劇場の総裁を務めている。読響初登場。



©Jānis Deinats

バス

エギルス・シリンス

EGILS SILINS, Bass

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年のブラームス〈ドイツ・レクイエム〉、23年のアイスラー〈ドイツ交響曲〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。



合唱指揮

水戸博之

HIROYUKI MITO,
Chorusmaster

1988年北海道江別市出身。東京音楽大学作曲指揮科(指揮)卒業、同大学大学院(修士課程)作曲指揮専攻指揮研究領域をいずれも首席で入学および卒業。これまでに札幌響、仙台フィル、山形響、新日本フィル、東京響、東京フィル、日本フィル、神奈川フィル、名古屋フィル、中部フィル、京都市響、日本センチュリー響、広島響、九州響等に客演。2023年2月しまね県民オペラ2023で〈ラ・ボエム〉を指揮し、オペラデビューを飾った。また合唱指揮者として、東京混声合唱団、新国立劇場合唱団と共演を重ね、東京混声合唱団定期演奏会の他、多くのオペラ公演などで合唱指揮を務める。現在、東京混声合唱団コンダクター・イン・レジデンス、白河市コミネス交響楽団(福島県)音楽監督。東京音楽大学指揮科講師。

12/14
|
12/24
〈第九〉公演

Artist

12/14
|
12/24
〈第九〉公演

Artist

12/17

12/24

〈第九〉
特別演奏会
【第1部】

Artist



オルガン

大木麻理

MARI OHKI, Organ

豊かな音楽性と丁寧な音色作りで高い評価を受けるオルガニスト。東京芸術大学、同大学院修了。ドイツ学術交流会 (DAAD)、ポセール財団の奨学生としてリューベック音楽大学およびデトモルト音楽大学を満場一致の最優等で卒業。第3回ブクステフーデ国際オルガンコンクール邦人初優勝、「プラハの春」国際音楽コンクール第3位など受賞多数。リリースしたCDがいずれもレコード芸術特選盤に選出。ソロ活動に加えて国内外の楽団、アンサンブルと多数共演、ミュージカルやポップス、和楽器とのコラボレーションなどオルガン音楽の普及にも努めており、その音楽性と高度なテクニックで各所から厚い信頼を得ている。ミュゼ川崎シンフォニーホールのホールオルガニストを務めている。

ベリオ
シンフォニア

「シンフォニア」という言葉は「シン（いっしょに）」と「フォニア（響く）」からなる合成語だ。“みなで演奏する”ことをざっくりと示す術語として、16世紀後半から使われるようになった。時を経て、これがオペラの序曲を指したり、管弦楽ソナタ（すなわち交響曲）のジャンル名として定着したりと、意味合いを変えていく。

19世紀以降、抽象的な純器楽であった交響曲自体が、徐々に“なんでもあり”の音楽作品（たとえばベートーヴェンの〈合唱付き〉やベルリオーズの〈幻想交響曲〉）となっていくことで、そのジャンル名である「シンフォニア（シンフォニー）」もまた、原初の語義である“みなで演奏する”ことへと先祖返りする。

だから、20世紀後半以降も「シンフォニア（シンフォニー）」は、自由に筆を振るえるジャンルであるはずだが、必ずしもそうはなっていない。歴史的な変遷のなかで染み付いた意味、とくに交響曲（の“名曲”群）を容易に想起させるからだ。その、いわゆるシンフォニーとの距離感を精緻に整理しなければ、軽々にこのタイトルは使えない。

ルネサンス期に「シンフォニア」の言葉を使い始めたイタリアに的を絞っても、その状況に変わりはない。20世紀後半に活躍した作曲家、たとえばマデルナ、トーニ、ノーノ、アルド・クレメンティ、エヴァンジェリステイ、ドナトーニらは総じて、「シンフォニア」には冷淡だった。その中でルチアーノ・ベリオ（1925～2003）だけが、この名前を正面から用いて自作品に冠する。

ベリオは音楽家の家系に生まれた。祖父も父もオルガニストだった。第二次世界大戦後にミラノで作曲の勉強を始め、アメリカ、スイス、ドイツなどで第一線級の音楽家らと交わりながら、みずからの腕を磨く。同時代のさまざまな作曲法、音列主義や偶然性、はたまた電子音楽などに触れながら、〈ノネス〉（54年）や〈セクエンツァ〉（58年）、〈パースペクティヴ〉（57年）といった作品を生み出していく。

創作の転換点は1958年の〈ジョイス礼讃〉。アイルランドの詩人ジェイムズ・ジョイスの書いた『ユリシーズ』の断片を3か国語で朗読させ、その音声を電子的に処理した。言葉ないし声を分解し、音素材として用いるわけだが、その音は一方で文学的な暗示のオーラも纏っている。

エドワード・エスリン・カミングスの3つの詩からテキストを採った〈サークルズ〉（60年）では、言葉の表意性を抑え、歌唱法の対比、声楽と器楽の対照など、さまざまな二項対立を前景に据える。他方、ベルトルト・ブレヒトやエドアルド・サングイネーティらの言葉を用いた〈エピファニー〉（59～61、65年）では、テキストの言語上の意味は保ったまま、そのテキストの順序を偶然に任せることで、新たな作用を引き出そうと試みる。

こうした取り組みを経てベリオは、1968年に声と管弦楽のための〈シンフォニア〉を書き上げた。ニューヨーク・フィルハーモニックの創立125周年を記念する委嘱作品だ（他に武満徹の〈ノヴェンバー・ステップス〉など）。

ベリオは同時代の詞章を曲中に用いるが、意味をとるのが困難なところまでそれらを変形させるので、聴いても言葉の内容はほとんど解らない。作曲家自身は「テキストの理解度の変化、『完全には理解できない』という経験そのものが、作曲の一部となっている。この経験は作品の音楽的展開にとって不可欠である」とする。

曲は全5楽章。1968年の初演後、作曲家は第5楽章を新たに書き下ろし、作品に加えた。5つの楽章はゆるやかなアーチ構成を採る。すなわち、第1と第5、第2と第4のふた組がそれぞれ類似し、その中央に第3楽章が君臨する。こうした構成法は目新しいものではない。たとえば、バッハはミサ曲口短調の〈クレド〉で、「十字架につけられ」（キリストの死）を中心に置き、その前後を同心円状に対応させた。また〈ヨハネ受難曲〉第22曲のコラール「あなたの囚われこそ、我らの自由」の前後も同様に配置している。中心に自ずと注目が集まる形。ベリオは第5楽章を加える際、〈シンフォニア〉もこうした構成にできる、つまり第3楽章にいつもの注意を向けさせることが可能だと気づき、それを実行に移したのだろう。

曲のつくりの点で触れておかなければならないことのひとつに、この作品とクロード・レヴィ=ストロースの神話学との関係がある。後述するが、〈シンフォニア〉第1楽章はレヴィ=ストロースの『生のもとの火を通したもの』（『神話論理Ⅰ』）からの引用をテキストとしている。また作曲家は、同書で紹介されたある神話の構成を、楽章のつくりで反映させたと主張する（レヴィ=ストロース自身はそれを聞いて

いささか困惑した)。

ベリオは第1楽章にのみ言及しているが、レヴィ=ストロースの神話学と〈シンフォニア〉とを見比べると、その方法論上の類似が作品全体に及んでいることに気付かされる。人類学者は、壮大な物語を描く各神話を「神話素」(“誰が何をした”レヴェルの最小単位)の大きさに切り刻み、それら「神話素」の間に対立軸(や例外)を見つけ、分析していく。

作曲家は〈シンフォニア〉で、この作業の“巻き戻し”をしているように見受けられる。つまり、切り刻んだ詞章や既存曲をさまざまに束ね、歌唱法上の対比や声楽・器楽間の対照性を浮き彫りにしていく。それらをアーチ構造の中に収め、抽象的ながら大きな物語を編む。その点でベリオはこの作品で、音楽の、もう少し範囲を狭めれば「シンフォニア(交響曲を含む同名ジャンル)」の新たな“神話”を創出しようと企図したのかもしれない。

第1楽章 レヴィ=ストロースの『生のもと火を通したもの』(1964年)から、水の起源を語るブラジルの神話を取り上げた箇所を、テキストとして引用する(仏語)。声楽と器楽の作る雲のような音響の中で、バス声部が「血が流れていた……」と語り出す。音楽はいささか“不整脈”気味に強弱を行き来する。やがてピアノが前面に出て、そこに管弦楽が合流していく。最後にサウンド要素として声楽が戻り、楽章を閉じる。

第2楽章「ああ、キング」 1968年4月のキング牧師暗殺を受け、作曲家が同時期に完成させた。全楽章の内、もっとも早い成立。8つの声楽パートが発声しているが、はじめは何を詠じているのか分からない。それが徐々に輪郭を得て、最終的には「マーティン・ルーサー・キング」の名として結晶する。

第3楽章「静かに流れるような身振りで」 音楽はグスタフ・マーラーの交響曲第2番第3楽章を下敷きにする。作曲家はその上で、バッハ、ベートーヴェン、ベルリオーズ、ブラームス、ドビュッシー、リヒャルト・シュトラウス、シェーンベルク、ラヴェル、ストラヴィンスキー、ウェーベルン、ベルク、ヒンデミット、ブーレーズ、シュト

ックハウゼン、プスール、そして自作品の断片を次々に引用しては、継ぎ接ぎにしていく。絵画同様、音楽でもこうした手法を「コラージュ」と呼ぶ。主要な詞章はサミュエル・ベケットの小説『名づけえぬもの』(英語版、1958年)の一部。他に日常語や、フランスの新左翼運動「五月革命」(1968年)のスローガンなどをちりばめる。音楽も言葉もめまぐるしく変化する。聴き手はその流れの内に、思いがけない音響・意味・情緒を見つけていく。

第4楽章 マーラーの交響曲第2番第4楽章に短く触れる。楽想は第2楽章「ああ、キング」に似る。「血の薔薇」(仏語)の言葉で冒頭楽章とのつながりを確保する。その他の詞章は第1~3楽章に登場した言葉の断片。

第5楽章 第1~4楽章のテキストを再構成して詞章とする。冒頭楽章の神話の続きを語る体裁をとる。作曲家曰く「詩的イメージとして示した神話に、物語的な側面を与える」。ピアノの独奏で始まり、すぐにソプラノ声部が前楽章同様「血の薔薇」と吟じる。

フルートをはじめ各パートが合流し、第1楽章と同じく言葉と音楽の“不整脈”が始まる。作曲家は終盤、それぞれ同じ動きでまとまる声楽群と器楽群とを対置し、その対照性を強調する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1968年／初演：1968年10月10日、ニューヨーク(4楽章稿)、1969年10月18日、ドナウエツシンゲン(5楽章稿)／演奏時間：約35分

楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、マリンバ、スレイベル、鞭、ウッドブロック、ギロ、ボンゴ、銅鑼、カステネット)、ハープ、ピアノ、電子オルガン、電子チェンバロ、弦6部、独唱(ソプラノ2、アルト2、テノール2、バス2)

機材協力(マイクروفोन)：株式会社ORB 

モーツァルト

レクイエム 二短調 K.626 (鈴木優人補筆校訂版)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、ヴァルゼック=シュトゥパハ伯爵の注文に応え1791年10月、本格的に《レクイエム》に取り掛かるも、そのふた月後には足早に天に帰ってしまう。モーツァルトが作曲できたのは〈イントロイトゥス〉の全体、〈キリエ〉〈セクエンツィア〉〈オッフェルトリウム〉の声乐パートおよび器楽の低音パートだけだ(〈セクエンツィア〉^{ちゆうび}掉尾の「ラクリモーザ」は第8小節まで)。作曲家は病床で、弟子のフランツ・クサヴァー・ジュスマイヤー(1766~1803)に作品の仕上げを指示した。

こうして、この作品の長い補筆の歴史が始まる。12月10日のモーツァルト追悼礼拝では、《レクイエム》から〈イントロイトゥス〉と〈キリエ〉が献奏されたとみられる。〈キリエ〉の管弦楽パートは未完だったので、ジュスマイヤーがこれを補った。

モーツァルトの妻コンスタンツェは、亡き夫と親しかったヨーゼフ・アイブラー(1765~1846)に全曲の補筆を依頼する。アイブラーは「ラクリモーザ」を除く〈セクエンツィア〉に管弦楽をつけたところで挫折。コンスタンツェは改めて、ジュスマイヤーに作品を完成させるよう頼む。結果としてジュスマイヤーは、〈キリエ〉〈セクエンツィア〉〈オッフェルトリウム〉にオーケストレーションを施し、「ラクリモーザ」の第9小節以降と〈サンクトゥス〉〈ベネディクトゥス〉〈アニュス・デイ〉の各曲を新たに書き、第1~2曲の音楽を終曲〈コンムニオ〉に転用した。

この弟子の仕事の前に、マクシミリアン・シュタードラー(1748~1833)が〈オッフェルトリウム〉の補筆に取り組んでいた。また先述の通り、〈セクエンツィア〉にはアイブラーのつけた管弦楽パートがある。ジュスマイヤーは全曲補筆に際し、ふたりの成果を参考にしようとした。

こうしてできたジュスマイヤー稿は1793年1月2日、コンスタンツェのための慈善試演会で初演された。同稿はいささか稚拙だったので、1970年代以降、これに代わるさまざまな補筆が現れる。バイヤー版、モーンダー版、ランドン版、レヴィン版などがそうだ。2013年、そこに新たな試みが加わる。鈴木優人版である。以下、鈴木版に従って各曲の概要を示す。

- I. イントロイトゥス(入祭唱) 第1曲「レクイエム」 「レクイエム(安息を)」に「ニ・嬰ハ・ニ・ホ・ヘ……」の音を当てる。作曲家はこの音型に作品統合の役割を負わせた。
- II. キリエ(憐れみの讃歌) 第2曲「キリエ」 モーツァルトのバロック研究が活きる二重フーガ。
- III. セクエンツィア(続唱) 第3曲「ディエス・イレ」 「最後の審判」を劇的に表現。同曲以降〈セクエンツィア〉の管弦楽はアイブラー稿を用いる。第4曲「トゥーバ・ミルム」 トロンボーンの先導に続き、バスが「最後の審判」の様子を歌う。第5曲「レクス・トレメンデ」 力強い合唱が、威厳を湛える父なる神に救いを求める。第6曲「レコルダレ」 精妙なアンサンブルの独唱陣が、子なる神に慈悲を求める。第7曲「コンフターティス」 バス音型の執拗な反復が、裁きの緊迫感を表す。第8曲「ラクリモーザ」と「アーメン」 末尾の「アーメン」は、1962年に発見されたスケッチを元に鈴木が書き下ろした短いフーガ。
- IV. オッフェルトリウム(奉献唱) 第9曲「ドミネ・イエズ」 キリストへの請願をポリフォニックに歌う。終盤はフーガ。第10曲「ホスティアス」 生贄と祈りを捧げる信仰者の心情をホモフォニックに表現する。終盤は前曲と同じフーガ。
- V. サンクトゥス(感謝の讃歌) 第11曲「サンクトゥス」 「聖なるかな」と唱え「万軍の主」を讃える。「ホザンナ」以降はフーガ。
- VI. ベネディクトゥス(感謝の讃歌) 第12曲「ベネディクトゥス」 讃歌の続き。後半は前曲と同じフーガ。
- VII. アニュス・デイ(平和の讃歌) 第13曲「アニュス・デイ」 冒頭のバス声部は第1曲の「レクイエム音型」をとる。
- VIII. コンムニオ(聖体拝領唱) 第14曲「ルクス・エテルナ」 冒頭の音楽で改めて「永遠の安息」を願う。 (澤谷夏樹 音楽評論家)

作曲：1791年(ジュスマイヤーらの補筆は1791年12月以降、92年12月まで)。鈴木優人補筆版は2013年/初演：1793年1月2日、ウィーン(ジュスマイヤー補筆稿)。2013年12月1日、札幌(鈴木優人補筆版)/演奏時間：約50分
楽器編成/バセットホルン2、ファゴット2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ポジティブ・オルガン、弦五部、独唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)、合唱

《歌詞対訳》 Requiem

訳：今谷和徳（音楽史家）

I. Introitus

Requiem

Requiem aeternam dona eis, Domine,
et lux perpetua luceat eis.

Te decet hymnus, Deus, in Sion,
et tibi reddetur votum in Jerusalem:

Exaudi orationem meam,
ad te omnis caro veniet.

Requiem aeternam dona eis, Domine,
et lux perpetua luceat eis.

II. Kyrie

Kyrie eleison.

Christe eleison,

Kyrie eleison.

III. Sequenz

(1) Dies irae

Dies irae, dies illa
solvat saeculum in favilla,
teste David cum Sibylla.

Quantus tremor est futurus,
quando Judex est venturus,
cuncta stricte discussurus!

(2) Tuba mirum

Tuba mirum spargens sonum
per sepulchra regionum,
coget omnes ante thronum.

Mors stupebit et natura,
cum resurget creatura,
judicanti responsura.

Liber scriptus proferetur,
in quo totum continetur,
unde mundus judicetur.

I. イントロイトゥス (入祭唱)

レクイエム

主よ、永遠の安息を彼らに与え、
たえざる光を彼らの上に照らしたまえ。

神よ、御身に賛歌をささぐるはシオンがふさわし、
エルザレムにて、御身に誓いは果たさる。

わが祈りききたまえ、
すべての肉体は御身に來らん。

主よ、永遠の安息を彼らに与え、
たえざる光を彼らの上に照らしたまえ。

II. キリエ

主よ、あわれみたまえ。

キリストよ、あわれみたまえ。

主よ、あわれみたまえ。

III. セクエンツィア (続唱)

(1) ディエス・イレ

怒りの日、その日こそ
ダビデとシビラの預言のごとく
この世は灰に帰さん。

すべてを厳しくたださんと
審判者が來たもう時、
いかに恐るしきものならん。

(2) トゥーバ・ミルム

全土の墓に
不思議なる響きを振りまくラッパが
すべての者を玉座の前に集めん。

審判者に答えんと
造られしものがよみがえる時、
死と自然とは驚かん。

すべてを書き記したる書物が
この世を裁かんとて
差し出されん。

Judex ergo cum sedebit,
quidquid latet, apparebit,
nil inultum remanebit.

Quid sum miser tunc dicturus?
Quem patronum rogaturus?
Cum vix justus sit securus.

(3) Rex tremendae

Rex tremendae majestatis,
qui salvandos salvas gratis,
salva me, fons pietatis.

(4) Recordare

Recordare Jesu pie,
quod sum causa tuae viae:
ne me perdas illa die.

Quaerens me, sedisti lassus:
redemisti crucem passus:
tantus labor non sit cassus.

Juste judex ultionis,
donum fac remissionis
ante diem rationis.

Ingemisco, tamquam reus:
culpa rubet vultus meus:
Supplicanti parce Deus.

Qui Mariam absolvisti,
et latronem exaudisti,
mihi quoque spem dedisti.

Preces meae non sunt dignae:
Sed tu bonus fac benigne,
ne perenni cremer igne.

Inter oves locum praesta,
et ab haedis me sequestra,
statuens in parte dextra.

かくて審判者が坐したもう時
隠れたるものはすべてあらわれ、
裁かざるものなからん。

その時、哀れなるわれは何を言わん。
正しき者さえ安らかならざるに
いかなる保護者をたのまん。

(3) レクス・トレメンデ

御恵みもて救わるべきものを救いたもう
おそるべき力もてる王よ、
仁慈の泉よ、われを救いたまえ。

(4) レコルダレ

慈悲深きイエスよ、心にとめたまえ、
御身わがために來たまえることを。
その日、われを滅ぼしたもうことなかれ。

御身われを求めて疲れて坐し、
十字架を受けてあがないたまえぬ。
かかる辛苦を無にしたもうことなかれ。

正しく罰したもう審判者よ、
評価を下す日の前に
赦しの恵みを与えたまえ。

われ罪人として嘆き、
わが顔罪によりて赤らむ。
神よ、嘆願し奉るわれを惜しみたまえ。

マグダラのマリアを解き放ち、
盜賊の願いを聞きいれたまいし御身は
われにも希望を与えたまいぬ。

わが懇願は価値なきものなれど、
慈悲深き御身、御恵みもて
われらが永遠なる火にて、焼かるることなき
ようにしたまえ。

羊の群れにわれを置き、
牡山羊より引き離し、
御身が右に置きたまえ。

(5) Confutatis

Confutatis maledictis,
flammis acribus addictis,
Voca me cum benedictis.

Oro supplex et acclinis,
cor contritum quasi cinis:
Gere curam mei finis.

(6) Lacrimosa

Lacrimosa dies illa,
qua resurget ex favilla,
judicandus homo reus:

Huic ergo parce Deus.
Pie Jesu, Domine,
dona eis requiem.

(7) Amen

Amen.

IV. Offertorium**(1) Domine Jesu**

Domine Jesu Christe, Rex gloriae,
libera animas omnium fidelium
defunctorum de poenis inferni,
et de profundo lacu:
libera eas de ore leonis,
ne absorbeat eas tartarus,
ne cadant in obscurum,
sed signifer sanctus Michael
repraesentet eas in lucem sanctam:
Quam olim Abrahae promisisti,
et semini ejus.

(2) Hostias

Hostias et preces tibi Domine,
laudis offerimus:
tu suscipe pro animabus illis,
quarum hodie memoriam facimus:
fac eas, Domine, de morte transire
ad vitam.

(5) コンフターティス

呪われしもの罰せられ
烈しき火の中におとさる時、
祝福されしものとともにわれを呼びたまえ。

われ、灰のごとく砕かれし心にて
ひざまずき、伏して懇願し奉る、
わが終わりの時に心を配りたまえ。

(6) ラクリモーザ

罪ある人が裁かるため
灰よりよみがえるその日こそ
涙の日なり。

されば神よ、彼を惜しみたまえ。
主よ、慈悲深きイエスよ、
永遠の安息を彼らに与えたまえ。

(7) アーメン

アーメン。

IV. オッフェルトリウム (奉献唱)**(1) ドミネ・イエズ**

主イエス・キリスト、栄光の王よ、
すべての死せる信者の靈魂を、
よみの刑罰、
深き淵より救いたまえ。
獅子の口より彼らを救い
彼らが地獄にのみこまれず、
暗黒に落ちこまぬよう、
旗手聖ミカエルが彼らを
清き光明に導かれんことを、
かつて御身がアブラハムと
その子孫に約したまいし生命に。

(2) ホスティアス

主よ、われらいけにえと賛美の祈りとを御身
にささぐ。
今日われらの記念する靈魂のために
それを受けいれたまえ。
主よ、彼らを死より生へと移したまえ。

Quam olim Abrahae promisisti
et semini ejus.

V. Sanctus

Sanctus, sanctus, sanctus,
Dominus Deus Sabaoth!
Pleni sunt coeli et terra
gloria tua.
Osanna in excelsis.

VI. Benedictus

Benedictus qui venit in
nomine Domini,
Osanna in excelsis.

VII. Agnus Dei

Agnus Dei,
qui tollis peccata mundi,
dona eis requiem;
Agnus Dei,
qui tollis peccata mundi,
dona eis requiem sempiternam.

VIII. Communio**Lux aetera**

Lux aeterna luceat eis, Domine,
cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.
Requiem aeternam dona eis,
Domine
et lux perpetua luceat eis.
Cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.

かつて御身がアブラハムとその子孫に
約したまいし生命に。

V. サンクトゥス

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな
万軍の神なる主よ。
主の栄光は
天地にみつ。
天のいと高きところにホザンナ。

VI. ベネディクトゥス

ほむべきかな、主のみ名によりて来る者。

天のいと高きところにホザンナ。

VII. アニウス・デイ

神の小羊、
世の罪を除きたもう主よ、
彼らに安息を与えたまえ。
神の小羊、
世の罪を除きたもう主よ、
永遠の安息を彼らに与えたまえ。

VIII. コンムニオ (聖体拝領唱)**ルクス・エテルナ**

主よ、永遠の光を彼らの上に照らしたまえ。
永遠に御身の聖人らとともに、
御身慈悲深きゆえに。
主よ、永遠の安息を彼らに与え、

たえざる光を彼らの上に照らしたまえ。
永遠に御身の聖人らとともに、
御身慈悲深きゆえに。

12/14

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

ベートーヴェン

交響曲 第9番 二短調 作品125 〈合唱付き〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は生涯に9つの交響曲を書いた。そのすべてが交響曲の歴史における輝かしい金字塔であり、とりわけ最後の交響曲第9番〈合唱付き〉はオーケストラに加えて、独唱、合唱までを要する異例の大作となった。以来、後世の多くの作曲家たちは9番目の交響曲を作曲する際に、ベートーヴェンを意識せざるをえなかったはずである。9という数字は交響曲の創作史におけるマジックナンバーといってもいい。

もっとも、ベートーヴェンの交響曲が9曲に終わったのは、たまたまというほかない。ほんのわずかでも作曲家の運命が違っていれば、交響曲第8番や交響曲第10番が最後の交響曲であってもおかしくはなかっただろう。ベートーヴェンの56年あまりにわたる生涯のなかで、交響曲の創作期間は決して長くはない。交響曲第1番が完成されたのは1800年。交響曲第8番は1812年。この12年間に8曲の交響曲が集中的に書かれている。だが、1812年の第8番から1824年の〈第九〉までにはさらに12年間のブランクがある。〈第九〉は季節外れの交響曲と呼びたくなるほど作曲時期が異なっており、もはや書かれなかったかもしれない交響曲が、最後に奇跡的に絞り出されたかのような印象すら受ける。

交響曲第8番から5年後となる1817年、ベートーヴェンはロンドンのフェルディナント・リースから手紙を受け取る。手紙にはロンドン・フィルハーモニー協会のために新作交響曲を2曲書いて訪英してほしいと記されていた。ベートーヴェンはこれをいったんは受諾する。このプランが実現していれば、ベートーヴェンはロンドンで交響曲第9番と第10番を披露していたことになる。

しかし、この訪英が実現することはなかった。ベートーヴェンは後に、自身の健康状態のため取りやめざるをえなかったと説明している。加えて、この時期、ベートーヴェンは甥カールの問題に心を砕かなければならなかった。1815年末にベートーヴェンの弟のカスパル・カールが世を去った際、その遺書には9歳の息子カールの共同後見人としてベートーヴェンと母親ヨハンナが指名されていた。甥カールに対して父親としての責任を負うことを望んだベートーヴェンは、ヨハンナはカールの養育者には不適當であると訴え、4年半にわたる法廷闘争に消耗させられる

こととなった。1818年にはカールの素行不良による退学処分や、出奔して母親のもとに駆け込むといった事件が起き、独身者ベートーヴェンがよもやの「家庭問題」で翻弄されることになる。当時の日記に心情が綴られている。

「神よ、私が愛しいカールのためによかれと欲していたことが、他人を苦しめなければならぬこの心の痛みをおわかりでしょう。聖なる御身よ、耳を傾けたまえ。すべての生ける者たちのなかでもっとも不幸なこの私に」

1822年、ロンドン・フィルハーモニー協会からふたたびベートーヴェンに交響曲の作曲依頼が届く。今度こそ9番目の交響曲が書かれることになる。1824年に作品が完成されると、ウィーンの人々からベートーヴェンの新作交響曲をウィーンで初演してほしいという嘆願書が作曲家のもとに届けられた。ベートーヴェンはこれに同意し、ケルトナートーア劇場での初演が決まった。初演では、客席から熱狂的な喝采が寄せられた。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポコ・マエストーゾ。神秘的なトレモロから主題の断片が垣間見え、やがて頂点で全貌をあらわす。あたかも混沌から秩序が生まれるかのような劇的な幕開け。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ。激しく煽り立てるようなスケルツォの間にひなびたトリオがはさまれる。ティンパニの活躍が印象的。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ。天上の音楽を思わせる長大な緩徐楽章。平安と瞑想はやがて金管楽器の強奏による突然の呼びかけで遮られる。

第4楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ。轟音とともに開始され、先の三つの楽章が回想された後、「歓喜の歌」の主題があらわれる。バス独唱に誘われて、合唱がシラーの詩による「歓喜に寄す」を高らかに歌う。トルコ風行進曲、トロンボーンを伴った荘重な教会音楽風の合唱、二重フーガなど、次々と多様なスタイルを巡りながら、爆発的な終結部へと向かう。 〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1818年頃~24年/初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルトナートーア劇場/演奏時間：約65分
楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦五部、独唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)、合唱

12/14

12/24

〈第九〉公演

Program Notes

第4楽章
An die Freude
「喜びに」

訳：金子哲理

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere!
おお 友よ この調べではない!
さらに心地よく 喜びにあふれる歌を とともに歌おう!

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!
喜び! 神の閃光 天国の乙女たち!
私たちは 炎に酔いしれて 天国の汝の聖地に 歩を進める!

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.
時の流れに激しく引き裂かれた者も 神の不思議な力によって 再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で すべての人々は 同胞となる

Wem der große Wurf gelungen, Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein!
ひとりの心の友を持つ 心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は 喜びに唱和せよ!

Ja, wer auch nur eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!
そうだ、この地上にひとりでも 魂の友を持つ者も とともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は 涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen Folgen ihrer Rosenspur.
すべての被造物は 自然の乳房から喜びを飲み
善人も 悪人も みな 創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben, Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben, Und der Cherub steht vor Gott.
神は 接吻と 葡萄酒と そして 死の試練をくぐった友を 与え給うた
虫にさえも神は快樂を与えた そして天使ケルビムは 神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn, Freudig wie ein Held zum Siegen.
喜びよ 太陽が広い空を 神の定めに従って駆けるように
同胞よ! 自らの道を喜びをもって進め! 英雄が勝利に向かって 走るように!

Seid umschlungen Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt Muß ein lieber Vater wohnen.
抱き合おう! 幾百万の人々よ! この接吻を全世界に!
同胞よ! 星々の彼方に 父なる神は住み給う!

Ihr stürzt nieder, Millionen? Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt! Über Sternen muß er wohnen.
幾百万よ ひれ伏したか? 人々よ 創造主を感じるか?
星々の天幕に 神を求めよ! 星々の彼方に 神は住み給う!

スコット クリスマス・セレブレーション

ジョナサン・スコットは国際的に活躍するイギリスのオルガニスト。作曲家、編曲者としても活動しており、オーケストラ曲などのオルガン・アレンジで人気を博している。クリスマスの名曲がオルガンの多彩な音色で華麗に奏でられる。

J. S. バッハ 古き年は過ぎ去りぬ BWV 1091

アメリカのイェール大学に所蔵されていたオルガン・コラール集『ノイマイスター・コレクション』の一曲。1984年にヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685~1750)の作品であることが判明した。新年を喜びとともに迎える。

ヴィドール オルガン交響曲 第5番から〈トッカータ〉

シャルル=マリー・ヴィドール(1844~1937)は19世紀後半から20世紀にかけて活躍したフランスのオルガニスト兼作曲家。パリ音楽院ではフランクの後任としてオルガンを教えた。シンフォニックな響きをもつ10曲のオルガン交響曲で知られる。オルガン交響曲第5番の第5楽章トッカータは、しばしば単独で演奏される人気曲。ヨーロッパではロイヤル・ウェディング等のセレモニーや、クリスマスの音楽としても使用される。疾走するような輝かしい楽想がくりひろげられる。

(飯尾洋一 音楽ライター)